平成二十七年度

第二十五回島根県雲南市

「永井 隆 平和賞」入賞作品集

島根県雲南市教育委員会

もくじ

小学生低学年の部

最優秀賞	ぼくのいのち　みんなのいのち	島根県・雲南市立飯石小学校	岡田陽希
優秀賞	しあわせがつづきますように	沖縄県・那覇市立小禄小学校	佐次田実結
佳作	あそんでくれるお父さん	島根県・雲南市立鍋山小学校	奥井晴樹
〃	平和がつづきますように	島根県・雲南市立西小学校	遠田美苑
〃	おじさん、ありがとう	島根県・雲南市立三刀屋小学校	黒田美月

小学生高学年の部

最優秀賞	平和を願う強い思い	島根県・雲南市立大東小学校	永井宏樹
優秀賞	平和へのかぎ	島根県・雲南市立大東小学校	若槻伊吹
〃	兄とわたし	島根県・雲南市立三刀屋小学校	村田遥
佳作	大切なお母さんだから	島根県・雲南市立掛合小学校	永瀬陽菜

中学生の部

最優秀賞	平和のメッセージ	広島県・ノートルダム清心中学校	廣畠留
優秀賞	平和への第一歩	長崎県・長崎市立戸町中学校	寺下日和
佳作	長崎で出会ったものと未来	広島県・ノートルダム清心中学校	古川怜菜
〃	「愛」とは何か、「平和」とは何か	長崎県・長崎市立小島中学校	谷口聖那

高校生の部

最優秀賞	認め愛～避難者と暮らした一年～	秋田県・秋田県立横手高等学校	後藤ゆうひ
優秀賞	つなぐ思い	長崎県・長崎県立佐世保北高等学校	重松里奈
〃	伝承すべき記憶	広島県・ノートルダム清心高等学校	吉田菜々子
佳作	永井隆の夢見た未来	島根県・島根県立三刀屋高等学校	内藤舞
〃	被爆者の声を聞く姿勢	広島県・盈進高等学校	橋本瀬奈

一般の部

最優秀賞	該当者なし		
優秀賞	該当者なし		
佳作	次の世代のために	福岡県	溝部貴代

最優秀賞

ぼくのいのち　みんなのいのち

島根県雲南市立
飯石小学校　一年
岡田陽希（おかだはるき）

ぼくのいのちは、おかあさんのおなかのなかからはじまったんだって。おかあさんのおなかにいることがわかったとき、ぼくはおたまじゃくしみたいなおおきさだったんだって。ちいさくてびっくりしたよ。それから、おかあさんのおなかのなかで、おへそからえいようをもらっておおきくなったんだって。おかあさんは、ぼくのしんぞうのおとがきこえたんだって。それが、おかあさんは、すごくうれしかったんだって。それをきいて、ぼくも、うれしくなったよ。だって、おかあさんは、ぼくが、げんきだとわかってくれたんだもの。

ぼくは、うまれてすぐになかなかったんだって。いのちがあぶないといわれて、びょういんのせんせいがすぐにとりだしてくれて、ぼくのいのちはたすかったんだ。おとうさんとおかあさんは、ないてよろこんでくれたんだって。おかあさんは、いまでも、せんせいにありがとうのきもちでいっぱいだって。ぼくのきもちもおなじだよ。おかげで、ぼくはこんなにおおきくなったんだから。

がっこうでいのちのべんきょうをしたよ。あかちゃんのしんぞうのおとをきいたよ。そのあとで、じぶんのしんぞうのおともきいたよ。ぼくのしんぞうのおとは、ドクドクいっていた。すごいつよいおとでびっくりしたよ。あかちゃんのときのてやあしのおおきさといまのぼくのおおきさとくらべっこしたよ。あかちゃんのてってちいさくてかわいいね。ぼく、いまではこんなにおおきくなったよ。

みんなのいのちのこともしったよ。とうやさんは、おなかにいるときからおかあさんとおはなししていたんだよ。しゅんすけさんやしろうさんは、おなかをつよくけって、おかあさんとあそんでいたんだって。たいとさんは、げんきでうまれてきて、おかあさんはないてよろこんでくれたんだって。ぼくといっしょだね。みんなの

いのちもたいせつにしてもらって、おおきくなったことがわかったよ。

ぼくは、むかしせんそうがあったということをがっこうのべんきょうで、はじめてしったよ。ひとがしにそうなときに、たすけられないことがあったとしって、びっくりしたよ。かなしかった。せんそうで、おかあさんがしんでしまったおんなのこのはなしをきいたとき、ぼくはなみだがでた。おんなのこは、どんなにさびしかっただろう。びょういんには、ひとがいっぱいいたんだって。せんせいは、たすけようとがんばったけど、たすけられなかったんだ。ほんとうにかなしかったよ。せんそうって、ひとをころすことなのかな。

ぼくのいのちは、たすけてもらえた。たすけてもらえてよかったよ。ぼくがうまれたとき、だいじにそだててくれてありがとう。おかあさんのおなかからうまれたいのちのことを、ぼくはわすれないよ。だいじにするね。そして、みんなのいのちもだいじにするよ。みんながげんきでいられることは、とってもしあわせなんだね。これからも、みんなでいっしょにたのしく、なかよく、くらそうね。

優　秀　賞

しあわせがつづきますように

沖縄県那覇市立
小禄小学校　二年
佐次田（さじた）　実（み）　結（ゆ）

六月二十三日は、いれいの日です。わたしは、七十年前にあったおきなわせんの話を、おばあちゃんから聞きました。

おばあちゃんが三さいのころにせんそうがありました。ひいおばあちゃんに、手をひかれながら、山の中にあるこやへ、みんなは二時間でのぼる山道を、四時間から五時間かかって、おばあちゃんたちはのぼったそうです。

たべものは、ふかしいもとおいものはっぱのみそしるを、たべていたそうです。

ひいおじいちゃんは、せん場にいっていたので、ひいおばあちゃんの親せきと生活していて、ようふくやくつもすくないので、まい日、はだしであるいていたそうです。

今のわたしは、じ分のたべたいごはんをおなかいっぱいたべることができます。まい日、あったかいおふろに入ってます。お気に入りのようふくをきて、くつをはいて出かけます。妹やいとこと、はしゃいだりわらったりたくさんおしゃべりしながら、あそびます。車やバスにのって、かぞくでかいものに行きます。

わたしは、たのしい気もち、うれしい気もち、そして、しあわせな気もちですごしています。

七十年前のせんそう中には、今のわたしの生活はできません。ひなんごやでは、みんなでごはんをわけあってたべるので、おなかはいつもすいているし、おふろも入れません。はしゃいであそんだら、おこられます。かぞくとはなればなれの生活です。わたしだったら、まい日かなしい気もち、さみしい気もちでいっぱいです。

今のわたしの生活は、とてもしあわせなことだと気がつきました。

わたしたちがしあわせに生活できるのは、せんそうをのりこえた人たちがいるからだと思います。わたしが大人になったら、じ分の子どもに「せんそうは、してはい

けない」ということをつたえたいなと思いました。そう思ったのは、わたしのおばあちゃんが、せんそうの話をしてくれたからです。それから、まい日しあわせにくらせていることを、わすれないために、「しあわせひと言日記」を書こうと思います。しあわせがずっとつづきますようにと、心をこめて書きつづけます。

佳　作

あそんでくれるお父さん

島根県雲南市立
鍋山小学校　二年
奥井晴樹（おくいはるき）

ぼくのお父さんは、おこるとすごくこわいけど、いつもよくあそんでくれます。

晴れるとよくするのは、キャッチボールです。お父さんとおにいちゃんとぼくでにわでします。たまにれおとそうが出てきます。おにいちゃんとぼくがかわりばんこになげたり、おにいちゃんのとれなかったボールをぼくがとったりします。三十分か一時間ぐらいします。ボールをとるのがじょうずになるのが楽しいです。お父さんはずっとなげてくれます。

こうえんに行ったときも、キャッチボールをしました。グローブが一つしかなかったから、おにいちゃんとかわりばんこにしました。おにいちゃんがしているときはれおとそうのせわをしました。

しんくんとあそんでおそくなったとき、お父さんがむかえに来てくれました。帰ってから、やきゅうのやり方をおしえてくれました。じょうずなげ方や、うち方を教えてくれました。今は、なげ方がちょっとへんだけど、うち方がじょうずになったと言ってくれました。

お父さんは、クワガタのつかまえ方も教えてくれました。前に、バレーボールのれんしゅうについて行ったら、す山先生が、ノコギリクワガタをくださいました。でも、一年生がもって行ってかえしてくれませんでした。だから、お父さんがとり方を教えてくれました。

「家の前の石にはちみつをぬっとけば、クワガタが来るよ。」と言ってくれたのであん心しました。夏休みにためしてみたいです。

りょうりをつくるのも、お父さんはじょうずです。やきにくの時は、お父さんは活やくします。まず、やさいを買ってきて、外にガスやてっぱんをじゅんびします。つぎに、やさいをきります。そして、にくややさいをやいてくばってくれます。ぼくたちもお手つだいをします。

おこのみやきの時も、キャベツをきって、やくじゅんびをしてくれます。この時は、丸いホットプレートでやいてくれます。たれをつけたらできあがりです。たこやきもやいてくれます。

どれも、とってもおいしいから、すごいと思います。

お父さんは、このほかに、家の回りの草かりもしてくれるので、安ぜんにくらせます。

こんなふうに、お父さんは、ぼくたちのために、たくさんのことをしてくれて、ぼくは大すきです。

せかいの中では、せんそうをしている国もあって、お父さんがせんそうに行ったり、しんでしまったりした人もいるそうです。うちのお父さんがせんそうに行って帰って来なくなったらいやです。どうか、せんそうのないへいわなせかいになってほしいです。

佳　作

平和がつづきますように

島根県雲南市立
西小学校　三年
遠田美苑（とおだみその）

わたしは、三刀屋のおじいちゃんと「なが井記ねん館」へ、よく本をかりに行きます。この前の休みに妹と三人で行った時、

「よせ書きを書きませんか？」

と、記ねん館の方に声をかけられました。急なお話に、わたしは何て書いたらいいかまよいましたが、周りにせんそうの写真があったので、『平和がつづきますように』と書きました。その時は、平和がどんな事かよく分からなかったけれど、この言葉が頭にうかびました。

わたしは、なが井はかせの本をかりて読んでみることにしました。記ねん館で見たようなせんそうや原ばくの事が出てきて、とてもこわくなりました。なが井はかせは、自分もびょう気のためきず口の出血が止まらない時も、よ命三年としんだんされて起き上がれないくらい体がよわっている時も、

「大じょうぶ。大じょうぶ。」

と言って、けがの人をきゅうじょされたり、びょう気の人をちりょうされつづけました。また、原ばくでおくさんをなくされても、ふんばって生きて二人の子どもを守ろうとされていて、本当にすごい方だなと思いました。

はかせがむすめさんにのこされた言葉に、『しっぽも一役』という言葉があります。この言葉の意味は、だれでも人のためになれる、出来ないと思ってもがんばればできる、たすけ合えないことはないという事でした。わたしは、初めはよく分からなかったけれど、目立たない小さな事でも、ていねいにやっていると人の役に立つ事があるんだなって思えるようになりました。わたしができそうな事は、人がこまっていたら声をかける、みんなが使う学級文この本をせいとんする、スリッパをつぎの人のためにそろえておく、妹のおせわをする、げんかんばきをする…。こんな風に小さな事も、「しっぽも一役」

になる事がだんだん分かってきました。

ながい井はかせがねたきりになった時に、友だちが「にょこ堂」をたててくれました。そこではかせは、たくさんの本や手紙や千まいの書をのこされました。「平和を」の書には、いろいろな考えをもった人が心を開いて、たがいにゆるし合うことが平和のもとになると書いてありました。三学年になってばいの人数になったわたしの学級では、毎日いろいろな事が起こります。でも、帰りの会のキラキラタイムに友だちにしてもらった事を発表してほめほめシャワーをします。トイレのスリッパをそろえていたり、泣きそうになった時にやさしい言葉をかけてもらったり…と、人の役に立つ事が発表されるとみんな笑顔いっぱいになります。また、金曜日には一週間のこまった事を話し合っています。トラブルをどうしたらいいか考えたり、ルールを見直したり、時にはあやまったりします。

小さくても人の役に立つ事をしたり、たがいの気持ちをきちんと聞いたりゆるし合ったりする事で、平和がつづいていきますように。

佳　作

おじさん、ありがとう

島根県雲南市立
三刀屋小学校　二年
黒田美月（くろだみづき）

わたしは、家ぞくとお父さんのしごと場の人といっしょに、おきなわりょ行に行きました。ちょっと学校を休みました。でも、はじめてのりょ行で、とても楽しかったです。

りょ行からかえってから、先生のお話を聞いてびっくりしました。わたしが、りょ行で通学はんにいなかったから、サポーターズのおじさんがとても心ぱいされたそうです。わたしがおくれて来ると思われて、ずっとまっておられたそうです。わたしは、今まで、おそくなったときに、サポーターズのおばさんに手をつないでもらってあるいたり、おじさんに車でおくってもらったりしたことがあります。だから、わたしが、またおそくなったと思って心ぱいしながら、まっておられたと思います。まさか、心ぱいされているとは思いませんでした。よそのおじさんなのに、心ぱいしてもらって、「ありがとうございます。」という気もちになりました。わたしたちは、いつも見まもってもらっています。大せつにしてもらっています。

二年生になった時に、たんにんの先生から永井たかしはかせの「如己愛人」ということばを教えてもらいました。相手のことを大せつにすることでした。おじさんは、よその子どものわたしを大せつにされています。わたしは、そのことばを思い出しました。

わたしは、サポーターズさんとのこうりゅう会のときに、きれいに作ったかざりをおじさんにわたしました。つぎのあさ、わたしは、おじさんと目があいました、にこっとされました。おじさんは、黄色いベストにわたしがあげたかざりをつけていました。うれしかったです。はずかしかったです。でも、また、つけてほしいと思いました。

わたしは、おじさんの気もちがわかりました。だから、

これからは、おくれずに行けそうです。でも、おくれるかもしれないけど、がんばってあるいたりはしったりして、通学はんの人といっしょに行こうと思っています。

最優秀賞

平和を願う強い思い

島根県雲南市立
大東小学校　六年
永井宏樹（ながいひろき）

本で読んだ戦争は、人を殺し、心を殺し、町をうばい、幸せや希望をうばうものだった。本で見た原爆は、人を世界を傷つけ、あっという間に何もかも変えてしまうものだった。そんな時代には、多くの人々が絶望するしかなかっただろう。しかし、そんな時、誰かと手をつなぎ合って「今」を生き、人を救うことを選んだ人がいる。その一人が永井博士だ。博士は原爆投下後、その日に被爆者の応急処置を始めた。すぐに人を救うことを決断した。博士が医者だからできたのだろうか。ぼくはそうは思わない。博士は、ぼくたちが呼吸をするような感覚で人の命を思い、ぼくたちがまばたきをする感覚で平和を願っていたのだろう。

博士の本を読むうちに、僕のすぐ近くにも博士と同じような思いを持った人がいると気がついた。ぼくの父だ。父は去年まで十年以上もの間、地区の消防団に入っていた。ぼくが三年生の時、町の中で建物三棟が全焼する大きな火事があった。父の勤めている会社のすぐ近くが現場だった。父は、すぐに現場に向かい、何人かの人々と共に、燃えている家のガスボンベを真っ先に移動させたそうだ。話によると十本くらいのボンベがあったらしい。引火して爆発するのを防ぐため、父はすぐに決断し、人々と助け合って行動したのだ。爆発すれば当然自分の命に関わることは分かっていただろう。しかし、人の命を守るため爆発寸前で数十キロはあるボンベを移動させた父を、ぼくはほこりに思う。

そんな父が、未来の幸せや平和を考えていることも分かった。学校の授業でぼくたちが平和をテーマに投書を書いた時だった。保護者はみんなの投書を読み、心に残った投書を書いた子供に向けて自分の考えを書くことになっていた。父はある友達の投書に向けて、カードいっぱいにコメントを書いていた。集団的自衛権につい

てだった。「自分がなぐられたらなぐりかえすのとは大きく違い、老人から赤ちゃんまで日本全国民が、なぐり合いに巻き込まれ多くの人が傷ついてしまうだろう。過去をふり返り、もう少し考えてみてほしい。」と書かれていた。真剣にぼくたち子供に向き合っていると思うと嬉しかったし、日ごろから平和について考えていることも伝わってきた。

ぼくたちは、永井博士記念館で如己堂を見た。如己堂は狭くて、小さな子供さんはとてもさみしい感じがしただろうと思った。でも、横になった博士から平和について話を聞く誠一さんと茅乃さんはきっと、平和を創ってくれる人がそばにいると感じて幸せな気持ちがしたに違いない。ぼくが父の話を聞いたり、父の思いを読んだりした時と同じように。

戦争、原爆の事実は変えられない。でも、未来はぼくたちの手で創ることができるのだ。未来を幸せに平和に、との願いは特別なものじゃなく、すぐそばにあると気づいた。大切なのは、日ごろから家族や友だちと平和について語り合い、平和の実現に向けて自分も関わっていくという強い思いを持つことなのだ。

優　秀　賞

平和へのかぎ

島根県雲南市立
大東小学校　六年
若槻伊吹（わかつきいぶき）

「長崎の鐘」「この子を残して」「ロザリオの鎖」。まだまだたくさんの本を書いた永井隆博士。どの本にも博士の平和を願う気持ちがあふれている。でも、こんなに多くの本が書けたのはなぜだろう。博士は、白血病という重い病気になりながらたくさんの思いと、たくさんの言葉で平和をうったえる本を書き続けた。それだけの思いをどうやって持ったのか。なぜ持つことができたのか。

私たちのクラスは、国語の授業で投書を書いた。テーマは「平和」だ。戦争について、幸せを感じるときについて、原爆について、マララ・ユスフザイさんについてなど平和という言葉から考えて書いた様々な投書があった。私が一番心に残ったのは、「当たり前のことができることこそが平和」と考える友達の投書だ。私はその投書を読む前は、平和とは戦争がないこと、原爆がなくなること、としか考えていなかった。しかし、その友達の投書を読み、話を聞くうちに、一番身近なことに私は気づいていなかったと思った。当たり前のことができない状態で生きている人が、今も世界中にはたくさんいるのだ。友達の言葉は、私に大切なことを気づかせてくれた。

また、こう考える人もいた。「平和は願うだけでは実現しない。」確かにそうだと私は深く納得した。たくさんの人々が平和を願っているのにもかかわらず、戦争は続いている。その友達は「利益を得るために武器を売買するような人を許さない国際社会をつくろう。」とも書いていた。私は戦争が続く要因の一つを知り、さらに考えが広がったように思った。

私は、友達の投書を読み、なぜそう書いたのか話し合う中で、気づかなかったことに気づけたり自分の考えが広がったり形を変えたりすることを体験した。世界の現実を知ること、未来のために今何とかしなければならないことが確かにあること、戦争の原因は単じゅんではな

いが、一人一人の努力と正しい理解があれば食い止められるかもしれないこと。友達の考えにふれることで私の平和への気持ちは強まっていくようだった。

私は今、なぜ永井博士がたくさんの本を書くことができたのか分かった気がする。記念館で見たたくさんの手紙の相手は、両親や親せきだけでなく、友達や、中には見ず知らずの人もいた。博士は、たくさんの方々とのふれ合いの中で自分の考えを深め、自分の世界を広げていったのではないだろうか。そうさせてくれた全ての人々を思ったとき「如己愛人」の言葉が自然と生まれたのだろう。

私は、人とふれ合うことが得意ではない。けれど友達の考えを知ることでこんなにも自分の世界が広がるのなら、長い時が経った今でも永井博士の言葉がこうして私の世界を変えてくれるのなら、人とのふれ合いが平和へのかぎだと確信する。それならもっとだれとでもふれ合いたいと思う。第二、第三の永井博士は、実は私の周りにたくさんいてくれるのだ。私も、その中の一人でありたい。

優　秀　賞

兄とわたし

島根県雲南市立
三刀屋小学校　六年
村田（むらた）　遥（はるか）

私の兄にはしょうがいがあります。私は兄が大好きです。ケンカをするとつい乱暴な言葉を言ってしまって、兄を傷つけてしまうときもあるけれど、明日には元通りになります。

ある日の学校の帰り道、私の前を歩いていた二人の男の子が、何かを見て笑い出しました。男の子たちが見ている窓の方を見ると、兄が変な格好をしています。私は二人の男の子についかっとなって、「笑うなあ。」と言ってしまいました。すると男の子が、「だって、変な格好をしてるんだもん。」と言いました。私は、笑わなくてもいいと思いました。すごく、悲しくなりました。私は、家に帰ると部屋に兄がいたので、「窓のそばで変な格好をすると、他の子にからかわれちゃうよ。」と言いました。そのとき、兄は「笑わせたかったんだよ。」と思ったのかもしれないし、「普通の格好をしてただけだよ。」と思っていたのかもしれません。

私は、人はなんで笑うのだろうと思いました。しょうがいのある人も同じ人間です。悲しさや怒りを感じないだろうとか、いじわるされても何も思わないなんて思ってほしくありません。変な格好をするのは、兄のありのままの姿だから、理解してほしいです。

兄の普通であることの基準と相手の普通の基準とは違います。基準が違っても、温かく見守っていてほしいです。そう思ってみると基準の違う人たちは、世の中にたくさんいるのかもしれません。みんな一生懸命に生きているから、その人の生活を見て、その人なりの基準を見つけてあげて、温かく見守ってほしいです。

私は兄のおかげで、兄の学校の行事に参加し、しょうがいのある方たちやその家族とふれあうことがたくさんあります。そこで優しさをたくさんもらいます。みんな他の人を思い合っているのを感じます。私も、兄がいる

から、優しくなれます。人のことを思えます。

母はいつも、学校へ、兄の送り迎えをしています。父はときどき、兄をドライブに連れて行きます。両親と兄は私の大切な家族です。家族がいれば、マイナスをプラスにかえて、人を思い合って一緒に暮らせると思います。

しょうがいのある人も差別の無いように生きられることが平和につながるのかなと思います。誰もが分かり合い、一生懸命に生きることのできる世界をつくることが平和への道だと思います。みんなそれぞれの基準をもちながら、平等に生きるべきだと思います。

兄は中学三年です。両親は、兄の自立のために、そろそろ寮に入れようと思っています。私は両親から「ときどき会いに行って、お兄ちゃんをすし屋に連れて行ったり、下着を買ってあげたりしてね。」と言われています。私が遠くに行っても会いに行こうと思います。両親が亡くなってしまったら、私が第二の親になります。妹としての役目を果たさなければなりません。これからも兄を見守り、一緒にしょうがいの壁を乗り越えていきたいです。

佳　作

大切なお母さんだから

島根県雲南市立
掛合小学校　四年
永瀬陽菜（ながせひな）

私の家族はお兄ちゃんとお母さんの三人家族です。お兄ちゃんはこわいけどやさしいです。お母さんは家族思いで、いつも気にかけてくれます。お兄ちゃんは、月曜以外部活です。毎日お母さんがつかれて帰ってきて夜ごはんを作ってくれます。

私はお兄ちゃんやお母さんがつかれているのにあまり手伝わなくておこられていました。お母さんがつかれていることはわかっていたけど、めんどうくさかったからです。

でも、ある日、仕事から帰ったお母さんが

「ふとんしいて。」

と言いました。そして、

「陽菜がお母さんを呼んでも、反応がなかったら、まきちゃんに電話して。」

と言ったので、びっくりして思わずなみだが出ました。私はすぐに、親せきのまきちゃんをよびました。

そしたらまきちゃんが、

「つかれすぎかな。」

私は

「どうして。」

と、聞きました。まきちゃんが、

「陽菜やかずが手伝いをあまりしていなくて体がつかれたんだと思うよ。ちゃんとお母さんの手伝いをしなくちゃだめだよ。」

と言われて、ちゃんとやろうと思いました。お母さんは一週間くらい休んで体が動くようになりました。

その出来事はショックでした。私があまり手伝わなかったから、お母さんは病気になったかもしれない。自分を責めたし、何よりお母さんが病気になったことが悲しくて、こわくてたまりませんでした。

それから私は変わりました。少しずつですが、仕事か

ら帰ってかたもみや夜ごはんを手伝うようになりました。そしたらお母さんが

「ありがとう。それを毎日してほしいな。」

と、言いました。私は今では、学校から帰ると洗たく物を取り込み、ご飯炊きもできるようになりました。お母さんと一緒に夕ご飯の用意するのも楽しいです。お母さんは、「陽菜。ありがとう。毎日気にかけてくれてうれしいよ。」と、言ってくれます。「お母さんが元気になったことがうれしいよ。」と私は心の中で思います。

お母さんは仕事をしながらも、私たちきょうだいのことをいつも気にかけてくれています。私は、四年生になったので、家の仕事を分担するのは当たり前と思うようになりました。あんなにお手伝いがめんどうだったのに、私がやることで家族が喜んでくれるから、私は幸せな気持ちになります。そういうものなんだなあとわかりました。学校でも、困っている人がいたら、声をかけたり、やさしくしたりできる自分に変わってきたように思います。お母さんを助けたいと思った私の心の中に小さな花がさきました。人にやさしくすると自分も幸せになれると信じてくらします。

◆中学生の部◆

最優秀賞

平和のメッセージ

広島県
ノートルダム清心中学校 三年
廣畠薫留（ひろはたかおる）

昭和二十年八月六日午前八時十五分。凄まじい光が広島を走った後、一瞬にして街は焼け野原となり、多くの人々の大切な命が犠牲となった。広島に世界で初めて原子爆弾が投下されたのだ。そうして被爆地「ヒロシマ」となった広島に私は生まれ、平和で幸せな日々をおくっている。

中学生になり、原爆についてより深く知る機会が増えた。学習を進めていくうちに、原爆と私には切っても切れない縁があるのではないかと思いはじめた。その理由の一つは、祖父が被爆者であるということだ。つまり、私は被爆三世だということになる。「被爆三世」という言葉を知ったのは中一の時。毎年八月六日に行われる平和式典に、初めて参加した時に原爆ドームの前で署名活動をしていた団体が持っていた旗に書いてあった「被爆二世」の意味を母に聞いたことがきっかけだった。母は私に「被爆二世」について、

「被爆二世っていうのはね、被爆者の子どものことを言うんよ。だから、お母さんは被爆二世。あんたはその子どもだから、被爆三世よ。」

と教えてくれた。私は驚いた。原爆は私が生まれる前に起きた過去の出来事であって私には直接的な関係は無いと思っていたからだ。この日から私の中で「原爆」という存在が前とは違う特別なものに変わった。

私は今まで四人の被爆者の方々から体験談を聞かせてもらった。私は四人がしてくださった話の内容の中に共通して言っておられることがあることに気がついた。それは、「原爆の悲劇を二度と繰り返してはいけない」「戦争や原爆の悲惨さを忘れないでほしい」という、これからの日本を担う若者へのメッセージだった。私はこれらのメッセージを直接、被爆者の方々の口から聞けたことを嬉しく思う。広島に生まれて良かったと思う。しかし、

聞いたまま何もしなければメッセージを聞いた意味がない。なぜなら、私一人の力がとても弱いからである。一人の力で国を担うことができるわけがない。このメッセージを語り継ぎ、多くの人と共有することができて初めて、メッセージを聞いた意味があると言えるのだと思う。では、被爆者の平均年齢が八十歳を超え、語り手が少なくなってきている今、メッセージを共有する為に誰が語り継ぐことができるのだろうか…。語り継ぐことができるのは、被爆者から直接メッセージを受け取った人達だと思う。受け取ったからにはそれなりの責任を持って語り継ぐべきだと思う。たとえ、語り継いだ人数が少なかったとしても語り継ぐという行為自体がメッセージを贈ってくださった被爆者の方への感謝の気持ちを示すことに繋がると思うし、原爆の犠牲者の供養にもなると思う。

世界が平和になること、それは誰もが願っていることだろう。だが、その願いとは裏腹に未だ戦争や紛争は絶えない。今までに人間の歴史の中で世界が平和になったことなんて無いのかもしれない。もしそうなら、争いをやめない人間は愚かだと思う。一刻も早く、世界が平和になるように努めなければならない。世界が平和になる為の第一歩は、戦争の悲惨さを知ることだ。世界を平和にするために私にできることは被爆三世として原爆の悲惨さ、被爆者のメッセージを世界の人々に伝えることだ。二度と原爆の悲劇を繰り返さない為に、戦争や紛争をしないようにする為に、私にできることを積極的に実行していこうと思う。

優秀賞

平和への第一歩

長崎県長崎市立
戸町中学校　一年
寺下日和（てらした ひより）

ピカッ、ドーン。一九四五年八月九日十一時二分、長崎に一発の原子爆弾が落とされました。死者七三八八四人、負傷者七四九〇一人、被災戸数一八四〇九戸と、原子爆弾のすさまじい破壊力で、長崎の景色を一瞬にして焼け野原にしました。

「戦争はおろかなことだ！戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである。」これは、永井隆博士の言葉です。私も戦争はおろかなものだと思います。戦争は、原子爆弾は、一瞬にしてたくさんの人の未来を奪うのです。親や兄弟とご飯を食べることも、友達と遊ぶことも、ただ青い空を眺めることでさえもできなくなってしまうのです。私は、親や兄弟を亡くした子どもや、大切な子どもを失った親は、どんなに悲しかっただろうか、苦しかっただろうかと考えると胸が痛くなります。戦争は、おろかで残酷です。

今、私たちが家族とご飯を食べて、学校で勉強をして、友達とたくさん遊んで、夜に安心して寝ることができているのは、日本が平和主義の国であるからだと思います。今、この時間にも世界のどこかでは戦争が起こっているかもしれません。もし今も日本が戦争をする国であったら、今私はここにいなかったかもしれません。だから私は、平和主義の日本にいることを幸せに思います。

この世界には、たくさんの人がいます。もちろん、人がたくさんいたら、たくさんの考え方があります。だから「戦争をして勝ち負けを、はっきりさせたい。」とか「核兵器は、持っていた方が良い。」と言う人もいると思います。だけど、戦争をしたり核兵器を使うということは、誰かが不幸になるということです。私の考える平和は、みんなが幸せであることです。だから、誰かが不幸になって、誰かが幸せになる。それは、本当の幸せ、平和ではないと思います。この世界が一歩でも、本当の幸

せ、平和に近づくには、一人一人が自分のことだけでなく、周りの人のことも考えること、自分の幸せのためにだれかを悲しませたり傷つけたりしないこと。それが平和への第一歩になると思います。みんなが、まず人のことを思う考え方になれば、戦争や核兵器もなくなると思います。

私が、そう考えるきっかけとなったのは、平和学習で知った永井博士です。永井博士は、自分も被爆して大けがを負っているのに、たくさんの被爆者の治療をしました。そのことを知った時に「これが本当の人を思いやる心だ！」と思いました。

今の私には、海外に行って核兵器廃絶を訴えるというようなことはできません。ですが、まず、周りの人のことを思うということは、私にでも誰にでもできることです。「私なんかが、誰かを思いやったところで世界が平和になるわけない！」と思う人も、少なくないと思います。ですが、みんながそう思っていたらこの世界は絶対に幸せで平和な世界になることはできません。例えば、バスで席をゆずるとか、たくさん荷物を持っている人に声をかけるとか、相手のことを思いやることができたらどんなに簡単なことでもいいのです。一人一人ができることは少なくても、世界中がそんな思いやりのある人でいっぱいになれば、この世界から戦争や核兵器はなくなると思います。

一人でも多くの人が、この世界に生まれて良かった、私は幸せだと感じることができるような世界を、私たちの思いやりの心でつくりたいです。

佳作

長崎で出会ったものと未来

広島県
ノートルダム清心中学校 三年
古川（ふるかわ）怜菜（れな）

長崎の原爆資料館である展示物を見たとき、私は言葉を失いました。そのとき、私が見たものは「手の骨とガラス」というものでした。

私はこの夏、学校の研修旅行で長崎の原爆資料館に行きました。私が住んでいる広島にも、もちろん原爆資料館はあります。長崎と同じ被爆都市である広島の学生として、平和についての学習をする機会も多く、何度も広島の原爆資料館を訪れることもありました。なので、長崎の原爆資料館に行くことを知ったとき、さほど感じるものはなく、広島と大してかわりはないだろうと思っていました。しかし、この展示物を見て、その考えはなくなりました。

その展示物は、高熱で溶けたガラスに人間の手の骨がくっついているものでした。大きさはこぶしより少し大きいくらいでしたが、その小さな塊から感じ取れるものは計り知れませんでした。原子爆弾の威力や、被害の大きさなど、様々なことが伝わってくるようでした。

今はもう撤去されてしまいましたが、広島の原爆資料館には、原子爆弾が投下された直後の広島の街の人々の様子をろう人形にして展示されているものがありました。そのように一目見ただけでも被害の大きさや悲惨さがわかるようなものではないのにも関わらず、それだけのものを感じ取らされた「手の骨とガラス」に私は興味を持ちました。

爆心地のそばで見つかったというそのガラスは、少し見ただけではガラスには見えないくらい変形しており、原子爆弾による熱風の強さを物語っていました。そしてそのガラスにくっついてしまっている人間の骨。一瞬にしてその方の命が奪われたことがわかります。このようにたったひとつの展示物から多くのことを考えさせられました。広島と同様に、長崎でも甚大な被害をもたらし

た原子爆弾。そのことを改めて再認識させられているようでした。

長崎の原爆資料館で出会ったひとつの展示物、「手の骨とガラス」。その出会いは、私の平和に対する考えをより深めさせてくれました。

永井先生が自らの生涯を終えるときまで過ごされていた「如己堂」。その名前の由来は「己を愛するように人を愛せ」というものです。私は今回長崎を訪れたことによって、永井先生のことを学び、深く感銘を受けました。亡くなる直前まで二人の子どもたちのことを気にかけ、子どもたちのために少しでも長く生きようという思いで病と闘いつづけた永井先生の生き方は、本当に素晴らしいものだと感じました。

現在、私たちは被爆された方々の生の声を聞くことができる最後の世代だといわれています。そんな私たちに、一体何ができるのでしょうか。私たちにできること、それは被爆者の方々の生の声や証言、想いなどをきちんと記録し、未来に伝えていくことです。今を生きる私たちだからこそできることをしっかりと受け止め、行動にうつしていくべきだと思います。このままでは、七十年前のあの日の出来事が、人々の記憶の中から消えてしまいます。私は絶対に嫌です。絶対にそのようなことにはなってほしくありません。一九四五年の八月六日、そして九日。この二日間のことは私たち日本人だけではなく、世界中の人々にも忘れさられてはいけないものです。これから先の未来に、どのようにして平和を伝えていくのかは、私たち次第です。未来へと残していくためにも、私たちには責任のある行動が求められているのだと思います。私は、永井先生の「己を愛するように人を愛せ」という言葉を未来へ伝えていきたいです。

佳作

「愛」とは何か、「平和」とは何か

長崎県長崎市立
小島中学校　二年
谷口聖那（たにぐちせいな）

私は長崎に生まれた。物心がついた時から八月九日は「原爆の日」、平和を願い世界に訴える日として育った。そのため、深く「原爆」「戦争」というものに、関わってきたつもりである。しかし、長崎の原爆に、とても深く関わりのある大切な人物についてあまりにも基本的な情報しか知らなかったことに気付かされ、その人物について調べるきっかけが今回となった。その人物こそが永井隆博士である。

永井博士は一九〇八年二月三日島根県松江市出身。出身校は長崎医科大学。死没は一九五一年五月一日長崎市である。永井博士はこの一生の中で「愛」と「平和」についてどのようなものを残していったのか私は深く興味を持った。

一つ目は「平和」である。永井博士は、「日本をめぐる国際情勢次第では、日本人の中から憲法を改めて戦争放棄の条項を削れ、と叫ぶ者が出ないともかぎらない」と言っている。しかし、今の内閣は永井博士が心配していたことをやろうとしているのではないだろうか。さらに永井博士は続けた。「そしてその叫びがいかにも最もらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかもしれない」と。まさにその通りだと私は考えた。他国との同盟を大切にし、そのために日本の自衛隊を戦場に踏み入れさせようとしているからだ。もし永井博士が生きていたら、必ず「反対」と叫ぶに違いない。

二つ目は「愛」である。まず愛には、恋愛、家族愛、友人愛、兄弟愛などいろんな愛がある。この中で私が注目したのが家族愛である。永井博士は子供がとても好きであった。永井博士の写真をよく見ると子供と写った写真が数多く存在する。この写真から考えるに永井博士が思う愛とは皆を大切に思い、誰一人と不幸の道を歩むのではなく、数多くの人々が幸せの道を歩んでほしいとい

う願いが込められていると私は感じた。

ここで、ある言葉を紹介する。「戦争絶対反対と叫び続けてくれ。」この言葉にはどれほどの思いが込められているのだろうか。これは永井博士が子供達に言い続け、これからも言い続けてほしい言葉である。この言葉を聞いてどう思うだろうか。私は、永井博士が想像を超えるほどの悲惨な経験をし、痛み、苦しみを味わったのだと思う。この言葉を聞いてこれほど胸に、深く刻み訴える言葉を感じさせられたのは、戦争や原爆を実際に体験し、心から戦争絶対反対と願っているからだと私は思う。

そして、永井博士は、原爆の前からレントゲンで被爆し、余命が短かったが、医者としての使命や自分自身をまさに病にかかってしまった人々のために、医学の発展、そして原爆の悲惨さを訴えようと体で白血病という病を調べ、医学をとおして人々を救おうとする偉大な人だ。

一方、永井博士はキリスト教の信者でもあった。原爆が落ちた日から一日もかかさず、「平和の鐘」を探したそうだ。探しはじめて何日も経ったある日、信者がやっと鐘を見つけ出し、みんなで抱き合って喜んだそうだ。その鐘の音は今でも平和を願い、朝、昼、夕と長崎の街に響き渡っている。

私は永井博士みたいにまだ、知識、強い精神が備わっていない。これからしっかりとした目標をたて、いろんな角度から多くの人々を支えられるような人になろうと強く心に思い、平和を願う長崎市民として、生きていこうと強く思った。

◆高校生の部◆

最優秀賞

認め愛
～避難者と暮らした一年～

秋田県立
横手高等学校　二年
後藤（ごとう）　ゆうひ

「ママ、ばあばを何とかして。」

私が大好きだった福島に住む祖母は、歌も踊りも裁縫も何でも上手だった。一緒に住めるようになって大喜びだったけれど、祖父が生きていた頃とは別人だった。変わったのは私も同じかもしれない。ハンディのある人を優しさで包む余裕がなくなっていた。

原発事故以来、祖母やいとこ、母の友人など、十五名と三匹での生活が始まった。合宿みたいだと楽しめた日はそう長く続かなかった。特に環境が変わったためか、祖母は認知障害を発症した。要介護認定が出た。

スーパーから品物が姿を消し、家にある物だけで工夫して「サバイバルごっこ」と楽しんでいた一ヶ月目。流通が再開し、支援物資が届けられるようになり、お風呂の時間や献立など不満の声が上がり始めた二ヶ月目。個人同士から家族単位でのいさかいが生まれた三ヶ月目。時間が経てば経つほど、よその家族と我が家のカルチャーショックに苦しめられた。私は「もし『それは違う』と思ったら親でも先生でも正すべきだ」という考えの親に育てられたので、暴力的なよそのお父さんに意見したら「よその家の育児に口出すな」と怒られた。逆に「うちは放任主義だから」と何をやっても怒らない親もいた。

人だけでなく動物まで気になるようになった。避難所で暮らす多くの人がペットと離れ離れになり悲しんでいるニュースを見て、せめて我が家に避難した人だけでも一緒にいてほしいと思っていたのに、家中を吠えながら走り回る子犬にいらつく。でも私は猫を飼っているので、その犬だけに文句は言えない。猫毛アレルギーだから犬を飼っていると言っていた相手だって我慢しているのだから。

おや？不思議だ。ライフスタイルの相違をペット経由だと認められるのに、人間相手だと認められない？自分

の心を分析する。いらつくのは自分自身に相手を批判する感情の波が立っている時だ。ペットに接する時は動物の習性を考えていたのに、人間に対しては何も考えずに文句だけを言っていたから反論されたのではないか。

猫にネギを食べさせてはいけないように、私がいいと思うことでも相手にとっては致命傷かもしれない。猫がなでなでしてと寄って来た時以外に触れるとフーッと唸られるように、求められた時以外の支援は迷惑だったかもしれない。父はこう言った。

「人間だから喧嘩もするだろう。でも絶対に『帰れ』と言ってはいけない。避難指示がいつ解除されるかわからない、いや、おそらく帰ることはできないと思う。風評被害はもっと酷くなるし、賠償金がもらえると分かれば嫉妬も酷くなる。最初は同情から優しくできても、被災者を非難する人も出てくる。そんな光景を見たらかばってやれ。ゆうひは被害者でも部外者でもない、当事者なのだから。」

一家族一室で暮らす不便さに気付き、共同生活初日の優しさを取り戻した頃、仲良くなった家族は去って行った。応急借り上げ住宅へ、マンションへ、全寮制の学校へ。使っていた全ての部屋が空き、それぞれの家族のオーラが残された。

「昨日のことはもう過ぎたことだし、明日のことはわからない。今日一日をいかに大切に生きるかが一大事である。」

津波からも地震からも放射能からも逃れて生き延びた人たちが好んでいた、ある日の格言カレンダー。カタカナ表記になじんでしまう「広島」「長崎」そして「福島」。文字は悲しいけれど、当事者は大切な一日を生きようと頑張っている。百年は草木が生えないと言われた広島も長崎も復活した事実が励みになる。我が家から再出発した家族を始め、福島県民全員「がんばったべ、すごいべ」と自慢できる日が来ると信じている。平和とは何も起きないことでなく、認め愛・励まし愛のある世界だと、窮屈な生活が教えてくれた。

◆高校生の部◆

優秀賞

つなぐ思い

長崎県立
佐世保北高等学校　三年
重松里奈（しげまつりな）

みなさんは井伏鱒二作の「黒い雨」をご存知だろうか。この話の舞台は、広島県東部、神石郡小畠村（現在の神石高原町）、私の祖父母やいとこたちが住む町であり、私の父が生まれた町だ。主人公の閑間重松とシゲ子夫妻は戦時中広島市内で被爆した。姪の矢須子は、直接被爆はしていないのだが、縁談が持ち上がるたびに、市内で勤労奉仕中に被爆した原爆症患者だという噂がたち、破談が繰り返されていた。そんなとき、矢須子にとてもよい縁談が持ち上がり、重松はなんとか成功させようと、矢須子が被爆していないことを証明するため、当時の自分の日記を清書しはじめる。しかし、実際矢須子は、黒い雨を浴びており、とうとう原爆症を発症してしまう。縁談は破談になってしまったが、日記を清書し終えた重松は、空にかかる虹に矢須子の回復を祈った。

この物語の主人公のモデルになったのは、私の曾祖父である重松静馬だ。私の祖父は、黒い雨の舞台となった神石高原町小畠を巡るフィールドワークを開催しており、生家や終章に出てくる池などを案内している。また、「志麻利」という施設で「黒い雨」の直筆原稿、井伏鱒二と重松静馬との手紙のやりとり、写真などを展示している。

昨年の夏休み、私は一年半ぶりに広島に帰省した。八月十四日、家族みんなでお墓参りに行った。その帰り道、いとこのうちの一人が祖父にこんなことを言った。

「おじいちゃん。おじいちゃんがいなくなったら誰が平和活動をするんかなあ。黒い雨の平和教育は途絶えてしまうんかなあ。なんかさみしいな。」

その後、祖父は帰り道にある池の前に家族を集めた。この池は乱塔池と呼ばれ、「黒い雨」の終章で、重松が矢須子の回復を祈った場所だ。祖父は、一般の方を案内するときと同じように、最後の場面についての説明を始

めた。「黒い雨」の最後のページにはこんな言葉が書かれている。

「『今、もし、向こうの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ。』どうせ叶わぬことと分かっていても、重松は向こうの山に目を移してそう占った。」

虹は普通、七色だ。祖父によると、白い虹も五彩の虹もあるそうだ。しかし、それらが出る確率は非常に低く、それくらい矢須子の病気が治る可能性は低いということを表している。矢須子のように、直接被爆はしていなくても、原爆症に苦しめられた人はたくさんいる。原爆は本当に多くの人の人生を一瞬で壊したのだと分かり、胸が痛んだ。

私は原爆や戦争の話がとても苦手で、今まで避けてきた。その夏は、そのことについて改めて考えさせられた。祖父ももう七十八歳だ。いつまで平和活動が続けられるかわからない。各地で平和教育の活動をされている方の間でも、高齢化が進んでいる。これから、次の時代に伝えていく役割を受け継ぐのは私たちだ。その夏をきっかけに、私は今まで手をつけていなかった「黒い雨」を読み始めた。長崎県と広島県以外の県に住む人たちの中には、八月六日や九日は何が起こった日なのかさえ答えることができない人もいると聞いたことがある。世界で唯一の被爆国として、長崎・広島県民だけでなく、全国民が原爆、そして戦争について考え、知ることが大切だ。長崎・広島どちらにも関わりがある私は、今多くのことを学び、感じ、考えたいと思う。そして、将来知り合う県外の友人や次の世代にこのことを伝えていきたい。

いま日本中が安全保障法案の法制でゆれている。こんな時だからこそ、強くそう思う。

◆高校生の部◆

優秀賞

伝承すべき記憶

広島県
ノートルダム清心高等学校　一年
吉田　菜々子（よしだ　ななこ）

炎天下の中、核兵器廃絶の署名を求める。今年もたくさんの外国人が原爆ドームを訪れていた。黙祷のサイレンが鳴るあの日も、もう近い。戦後七〇年という特別な年に、私に何ができるだろうか。

小学六年生の時、私の平和活動の原点ともいうべき平和記念資料館を訪れた。まずはビデオシアターに入る。その瞬間、冷気が素早く私の身体を覆った。観客は誰もいない。暗闇の中、ただ淡々と原爆直後の壊滅的な広島の様子が映し出されていた。川に浮かぶ無数の焼死体、皮膚を垂らし飛び出した内蔵を抱え、治療を求める人の行列、死体を踏んづけながら行く米軍の姿。映るもの全てが狂気に満ちていた。戦争は恐怖を生み、人の心も理性も何もかも奪うのだ。見るに耐えられぬ現実に、私はビデオシアターを飛び出した。この時私は初めて、戦争の真の恐ろしさを知った。そして、体験した者にしか分からない、想像を絶する苦しみの存在も。痛々しい過去の姿も。私は此処に来てやっと頭ではなく、心で戦争の愚かさを理解できたのである。その後見学した本館や、伺った証言では、犠牲者や遺族の無念を感じ、「No more Hiroshimas」の想いを噛みしめた。文字だけでは知り得ない被爆者の想いがそこにはあった。

資料館には、知ろうとしないと見えない苦しみや、目の前にしなければ分からない悲しみがたくさんある。これらを知らなければ未来の平和を考えることはできない。受け身では駄目なのだ。自分から動かなければ本当の平和の価値には気付けない。私はそれを伝えたくて署名活動や平和公園案内を始めた。核抑止論や戦争賛成の意思を唱える前にまず資料館に来てほしい。物言わぬ遺品は、核兵器がもたらす悲劇を理屈ではなく肌で感じさせてくれる。七〇年来の苦しみを目の前に、じっくり考えてほしい。そういう意味では、今年の私のスローガン

は伝承であると言える。

そして私が平和を語るには、被爆者である祖父の存在が欠かせない。八月六日午前八時十五分、祖父は爆心地に近い鶴見橋で、強烈な熱風に曝された。阿鼻叫喚の地獄絵図だったという。手足が焼け爛れ、瀕死の状態であった祖父に、見知らぬ人が次々と手を差し伸べてくれた。ある人は自らの火傷を顧みず祖父をおぶって運んだ。また、少ない食料を分け身近な物で応急処置を施してくれた人もいた。祖父はこの体験を語る間、何度も彼らに感謝の言葉を述べた。そして最後にきっぱりとこう言った。

「人は助け合わにゃいかん」

私は、その言葉は平和の根幹であると感じた。祖父の命を繋いだのは人の思いやりであり、彼らがいたから、今の私がいる。今世界には貧困や紛争が蔓延しているが、もし一人一人がひとかけらの思いやりを持てたならどうだろう。銃を向ける前に、撃たれた者の痛みを考えてみる。残された者の悲しみを想像してみる。人から作物を搾取する前に、その家族の明日の糧を考えてみる。それだけで誰かの命が救えるかもしれない。

永井博士は、その事を「己の如く人を愛せよ」という言葉で語り継いだ。ならば私は祖父の言葉で、人を愛する事の大切さを伝えたい。祖父は自身の原爆後遺症について多くは語らなかった。癌を患い長年痛みに耐え続けた事や、ケロイドの残る腕のために、料理人という夢を断たれた事は全て祖母から聞いた。祖父がそれを語らなかったのは、原爆の悲惨さより、未来の平和を形作るすべを伝えたかったからだと思う。私は命のリレーの中でそのバトンを受け取った。私には、広島の想いを世界に届け、過去を未来に繋ぐ使命がある。祖父が受けた優しさに今度は私が恩返しする番だ。祖父の背を思いながら、「助け合わにゃいかん」と叫び続けていきたい。愛のあふれる世界をめざして――。

佳作

永井隆の夢見た未来

島根県立
三刀屋高等学校　二年
内藤　舞

永井隆博士の考える「平和」とはどのようなものだったのだろうか。戦争のない世界、人々が笑って生きることのできる世界。病と戦いながら、数多くの作品を残した博士はどんな未来を夢見ていたのだろう。

今年、日本は終戦七〇周年を迎える。毎年八月になると沢山の戦争に関わるドラマや映画が放送される。私が初めて戦争について知ったのは小学生の時だ。自分の住んでいる国でこんな事が起こっていたのかと衝撃を受けたことを今でも覚えている。初めて小学校の図書室で「はだしのゲン」を読んだ時は、本当に恐ろしかった。今まで戦争について沢山話を聞いて、見て、学んできた。それでも、私の心の隅には「昔のこと」という考えがあり、遠い昔の話で、自分には関係のないことだと思っていたのだ。しかし、そんな中で集団的自衛権が可決され、日本がまた戦争に巻き込まれる可能性がでてきた。やっと私の中の戦争は昔のことという概念が消え始めた。

私が祖母に戦時中の話を聞いたのはごく最近のことで高校二年生になってからだ。そこで初めて祖母に七人兄弟がいたことを知った。それまで私はずっと祖母は四人兄弟だと思っていた。話を聞くと、三人とも小さい頃に栄養失調が原因の病で亡くなったと分かり、今の自分がとても幸せなことに改めて気付かされた。私が小さい頃、嫌いな食べ物を残したりすると「ちゃんと食べなさい。食べたくても食べれん人もおるんだよ。」とよく祖母に叱られた。私は祖母からこの話を聞くまでは、祖母はアフリカなど発展途上国の子供達のことをいっているのだと勘違いしていた。祖母のいう「食べたくても食べられない人」はきっと戦時中の自分達と重ねていたのだと気付いた。祖母は幼い私にそういう度に、辛かった過去、亡くなった兄弟のことを思い出していたのだろうか。そう考えると胸が押しつぶされそうになる。

もう一つ祖母の話を聞いている中で、祖母の母の兄弟、私の曽祖母にあたる人の兄弟が硫黄島で戦死していたことを知った。私はこの時初めて自分の先祖が戦争によって命を奪われていたことを知り、今まで遠く感じていた戦争がとても身近に感じ怖くなった。私は何度か硫黄島での悲劇を描いた「硫黄島からの手紙」という映画をみたことがある。私が覚えている中で、この映画は私が初めて見た、戦争を題材とした映画だった。初めてこの映画をみた時は本当に怖くて、何度か耳を塞いだ。私の母も祖母もこの映画を見たくないという。今でもテレビでこの映画が放送されていると、すぐにチャンネルを変えてしまう。「何で変えるの?」と聞くと「怖い」といっていた。

戦後七〇年経っても戦争を体験した人が戦争を忘れることは出来ない。一人一人の心の中に辛かった記憶が残っている。その人達にとって戦争はすぐ近くにあるのだ。戦争が終わり、どれだけの人が喜び、亡くなった家族、友達のことをどれほど悔やんだだろう。日本は唯一、原爆の被害を受けた国として、戦争をしない国としてあるべきだと私は思う。これだけ多くの人々に深い傷を残した戦争をなぜくり返そうとするのだろう。深い傷をおった人々になぜまた同じ思いをさせるのか私には分からない。永井隆博士も戦争をくり返す事はあってはならないと願っているはずだ。永井隆博士の考える平和、そして戦争により命を奪われた人、家族を失った人の考える平和は、人々が食べ物に困ることもなく、戦争におびえて暮らすことのない世の中だと思う。永井隆博士の夢見た未来に戦争、貧困はないはずだ。その為にも私たちは戦争という負の過去を、人間の犯した罪を忘れてはいけない。

戦争は「昔の話」ではなく世界中で今この瞬間も起きていて、多くの人がおびえ、命が危険にさらされていることを忘れてはいけない。博士の夢見た世界が実現されることを私は願っている。

◆高校生の部◆

佳作

被爆者の声を聞く姿勢

広島県
盈進高等学校　二年
橋本瀬奈（はしもとせな）

「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない。」これは、被爆者の敵対と憎悪を超えた素朴で崇高な平和の思想。被爆者の平均年齢が八十歳を超えた今、私は核兵器廃絶（以下、「核廃絶」と略）と世界平和のために、この思想を何としても後世に伝えねば、と思う。

そのために私は、昨年から本格的に、核廃絶の署名活動を仲間と行っている。私は今年、学校代表となり、この活動に向き合っている。どんなに暑くても、大きな声を出して、笑顔を絶やさず街頭に立ち、誰よりも多くの署名を集める。今夏、自分に与えた課題だ。

「核抑止こそ平和の道。署名なんて無駄だ。」

「核廃絶は平和ぼけ。核を持って国を守る。」

そんな声も現実だが、私は、被爆者や市民の「ありがとう」のことばを選ぶ。

父方の曾祖父は七〇年前の八月六日、原爆に命を奪われた。私はこの事実を知ってはいたが、いつ、どこで、どのように亡くなったのかは、掘り下げて知ろうとしていなかった。

しかし、署名活動にあわせ、被爆体験を聞く機会が増え、核廃絶の思いを強くするにつれ、私は曾祖父に会いたくてたまらなくなった。そして、普段あまり話をしない両親に思い切って曾祖父のことについて聞いた。両親は、私の意をくみ、一緒に親戚を回り、曾祖父を訪ね歩く機会をつくってくれた。そして今夏、やっと曾祖父に出会った。親戚が大事に写真を保管してくれていたのだ。

広島県警の警察官。三十二歳だった曾祖父。ちょび髭のきりっとした顔つきで、家族と一緒に写っていた。なんとなく父や自分に似ているところに親近感がわいた。やっと出会えたという嬉しい気持ちとともに、どうして死ななければならなかったのかという悔しさと悲しさがこみ上げ、涙がこぼれた。

曾祖父は単身赴任で広島に勤務中、亡くなった。遺骨も遺品もない。亡くなった場所も分からない。ただ、親戚に語り継がれた曾祖父の最期の言葉が残っていた。

「水がほしい。」

妻と子どもを遺し、さぞ、無念だっただろう。永井博士の『この子を残して』。人間愛に胸打たれた。曾祖父の無念と重なる気がした。

五年に一度開かれるＮＰＴ＝核拡散防止条約再検討会議。だが今年は決裂。理由は、端的に言えば、核保有国が、核軍縮を誠実に実行する意志がないということだったと、私は思う。

そんな世界情勢にあって、オーストリアを中心とする非核保有国やＩＣＡＮなど核兵器廃絶のための国際ＮＧＯ組織は、核兵器の非人道性を訴え、核兵器禁止条約を結ぶよう、世界に働きかけている。核を持たない国が核保有国を包囲しようとする動きだ。今回、オーストリアが、「核兵器禁止条約を結ぶ努力を誓う文書」（「人道の誓約」）を提出したら、オーストリア以外の一〇六カ国が賛同。ＮＰＴ加盟国の半数以上が「国際法で核兵器を禁止すべきだ」と表明。だが、被爆国日本はこれにサインしていない。なぜか。サインすれば、米国の「核の傘」に守られなくてもいいという宣言になるからだ。広島平和文化センターの小溝泰義理事長は言う。

「核抑止論はおどしの平和。廃絶のために、私たち市民の小さな運動の積み重ねと連帯こそ最も効果的だ。」私もそう確信する。

八十二歳の女性の証言に胸を締め付けられた。

「私たち夫婦は二人とも被爆者で、子どもが障がいを持つのを恐れ、子どもはつくらないと約束しました。ある日、近所の医者にそれを言うと、『あなた方も苦しかろう。でも、たとえ障がいを持っていようと、どんな命もかけがえのない命。あなた方の考えは、障がいを持った人々に対する差別ではないか。』私たち夫婦は思い直して、子どもをつくる決心をしました。みなさんに知ってほしいことは、被爆者は誰もが、こんな思いをしながら生き抜いてきたという事実です。」

これも、核兵器の非人道性である。被爆七〇年。今こそ、私たちは、人間愛に依拠した永井博士の生き様に学ぶべきである。私たちの真摯な被爆者の声を聞く姿勢が問われている。

佳作

次の世代のために

福岡県
溝部貴代（みぞべたかよ）

今年は太平洋戦争の終結から七十年の節目の年であり、戦争にまつわる出来事がメディアで大きく取り上げられている。その節目の年に国会では、国民の納得のいかない状態のまま安全保障関連法案が認められようとしている。すぐに戦争に結びつく法ではないという解釈もあるが、恒久平和をめざし、世界に誇れる憲法第九条を持つ日本が変わりつつあるような気がしてならない。

その中で、真の平和を維持するために、子を持つ母として、子供たちに安心して過ごせる未来を残すため、今の私が日々の生活の中でできることは何であろうか。

私は本好きの子供だった。戦争のことも本から得た知識が多い。「ひろしまのピカ」の挿絵に衝撃を受け、「ガラスのうさぎ」に涙した。映画で観た「黒い雨」は途中、目を背けずにいられなかった。私たちの子供の頃は、原爆記念日は登校日になっており原爆のこと、そして戦争の悲惨さを学ぶ機会であった。修学旅行で訪れた長崎の博物館では、あまりの残酷さに本では得られない衝撃を受け、言葉を失った。ただ背筋が凍るほど怖かったことを覚えている。今こうして振り返ると、子供の頃の私の周りには常に戦争を意識させる何かがあった気がする。

だが今、私の子供の周りを見てみるとあまりに過去に起こった残虐な出来事にふれる機会が少なくなってきているように思えてならない。そして教科書で学ぶ薄っぺらな知識だけしか持たない人が増え、負の歴史に目を背ける人が増えてきているように感じる。被爆者に暴言を吐いた修学旅行生がメディアに取り上げられたのも記憶に新しい。登校日であった原爆記念日はいつの間にかなくなっていた。平和の大切さを学ぶ機会であった修学旅行も学ぶための旅行というより、子供たちの楽しさを優先するものに変わってきている気がする。「平和は大切だ」というけれど平和の大切さを実感するには、過去の

事実を知らなければ難しいだろう。修学旅行生が被爆者の方に暴言を吐いたのも彼らが何も知らないからだ。原爆のことを知らない。原爆だけじゃない、戦争のことも知らない。この国に起こったこと、この国がしてきたことを知ろうともしない。無知の怖さを今、痛感している。

カナダの小学校でボランティアをしていた時、現地の先生が日本の原爆のことを授業で取り上げる機会に立ち会った。当時小学一年生だった子供たちは広島の「原爆の子の像」のモデルとなった佐々木禎子さんのビデオを見て涙を流していた。

「どうしてこんなことをするの。お友達なのに。」

と言っていた。海外メディアの方たちが今なお、永井博士のお孫さんにインタビューをするため、わざわざ長崎まで足を運ぶという話も耳にする。イギリスでは永井博士の映画が製作中である。日本では長崎の永井博士を知らない人の数は増え、戦争のことを語れる人も激減している。国内では忘れられようとしていることを国外の方はこうやって取り上げ、伝えよう、残そうとしている。日本人として恥ずかしい思いだ。

最後まで隣人愛を伝えようとした永井博士はちょうど私と同年代で亡くなった。私は永井博士の言葉に今、私たちが伝えなければならないことが見えると感じている。

昨今、ニュースをにぎわしているのは残虐な事件ばかりである。昨年は「人を殺してみたかった」と友人を殺した高校生。今年に入ってからは、同じグループにいた中学生を殺した三人の少年。物が豊かになり、何不自由ない生活の中で失われつつある物がある。それは人を思いやる気持ちであり、相手の立場になって物を考えることであろう。まさに永井博士が伝えたかった人として大切なことだ。そしてそれは今私が伝えたいことの一つでもある。

私がもう一つ伝えたいことは、学びの大切さである。子供たちには平和を守るために自分の国がされたことだけではなく、自分の国がしたことも正確に学んでほしいと思う。日本側からだけでなく、他国からの目線でも過去を見つめなければならない。そのためには語学力や常にアンテナを張り巡らせて、学ぶ機会を無駄にしないという心掛けが必要だ。

相手を思いやる心と学ぼうとする気もち。この二つこそが、私が子供たちに伝えていきたいことであり、私自

身、まだまだ欠けている点である。子供たちに伝えると同時に、子供と共に学び、心を成長させる親でありたいと願っている。青少年ピースフォーラムから帰宅した子供が私にこんな言葉を教えてくれた。

「微力だけど無力じゃない」

まさに一人一人の力は微力で、何もできないと思いがちだが何もしないでいるのでは何も変わらない。だから微力だけど今の私に出来ることをやっていきたい。平和な日本が永久に続きますようにと祈りながら。

第二十五回　島根県雲南市永井隆平和賞　最終選考作品一覧ならびに受賞結果

【小学生低学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
岡田陽希	ぼくのいのち　みんなのいのち	島根県	雲南市立飯石小学校 一年	最優秀賞
佐次田実結	しあわせがつづきますように	沖縄県	那覇市立小禄小学校 二年	優秀賞
奥井晴樹	あそんでくれるお父さん	島根県	雲南市立鍋山小学校 二年	佳作
遠田美苑	平和がつづきますように	島根県	雲南市立西小学校 三年	佳作
黒田美月	おじさん、ありがとう	島根県	雲南市立三刀屋小学校 二年	佳作
須山俊輔	キラキラピカピカ　かがやくいのち	島根県	雲南市立飯石小学校 二年	
原　飛翔	「会う」と「合う」	島根県	雲南市立飯石小学校 三年	
湯淺萌未	「ヒーローになりたいな」	島根県	雲南市立掛合小学校 三年	

【小学生高学年の部】

永井宏樹	平和を願う強い思い	島根県	雲南市立大東小学校 六年	最優秀賞
若槻伊吹	平和へのかぎ	島根県	雲南市立大東小学校 六年	優秀賞
村田　遥	兄とわたし	島根県	雲南市立三刀屋小学校 六年	優秀賞
永瀬陽菜	大切なお母さんだから	島根県	雲南市立掛合小学校 四年	佳作
藤原綺麗	平和とは…	島根県	雲南市立寺領小学校 六年	
石倉　要	永井博士の生き方にふれて	島根県	松江市立八雲小学校 五年	
伊達賢徒	「愛する」こと	島根県	雲南市立飯石小学校 四年	
松村航希	ひいおじいさん、ありがとう。	島根県	雲南市立掛合小学校 五年	
加藤大良	家族と過ごす幸せ	島根県	雲南市立掛合小学校 六年	
市場想太郎	祖母からもらった花束	島根県	雲南市立三刀屋小学校 六年	

【中学生の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
廣畠薫留	平和のメッセージ	広島県	ノートルダム清心中学校三年	最優秀賞
寺下日和	平和への第一歩	長崎県	長崎市立戸町中学校一年	優秀賞
古川怜菜	長崎で出会ったものと未来	広島県	ノートルダム清心中学校三年	佳作
谷口聖那	「愛」とは何か、「平和」とは何か	長崎県	長崎市立小島中学校二年	佳作
大塚希美	挨拶の秘密	島根県	雲南市立海潮中学校二年	
濵岡麗奈	「平和」について考える	広島県	広島市立楠那中学校三年	
板持暢講	平和とは	島根県	雲南市立三刀屋中学校三年	
難波和帆	「来てほしいから」	島根県	雲南市立三刀屋中学校二年	

【高校生の部】

後藤ゆうひ	認め愛～避難者と暮らした一年～	秋田県	秋田県立横手高等学校二年	最優秀賞
重松里奈	つなぐ思い	長崎県	長崎県立佐世保北高等学校三年	優秀賞
吉田菜々子	伝承すべき記憶	広島県	ノートルダム清心高等学校一年	優秀賞
内藤舞	永井隆の夢見た未来	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	佳作
橋本瀬奈	被爆者の声を聞く姿勢	広島県	盈進高等学校二年	佳作
西村風輝	ひまわりの愛と命	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
陶山裕可里	今の私と未来の私たち	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	

【一般の部】

氏名	テーマ	都道府県名	賞名
溝部貴代	次の世代のために	福岡県	佳作
谷関幸子	軍人恩給	東京都	
山尾一郎	忘れたくない永井隆博士	島根県	
高木美輝男	平和への一歩	島根県	
福田結花	知ること	島根県	
吉永恵子	初めの第一歩は	大阪府	
藤本　剛	人として生きる	島根県	
鎌田俊三	「語り歌い継ぐ夏」	広島県	

NO
YES
KU
2007. 8. 26